

トピックス ―― 行き場のない女性たちについて考える

昨年秋は、女性問題を考えるうえで非常に示唆的な2つの講演に参加しました。ひとつは市川房枝政治フォーラムの中の仁藤夢乃氏「居場所のない少女たちを支援して」、もうひとつはTAMA女性センターがDV防止月間に開催した三井マリ子氏「北欧のDV対策と日本の今後」です。



◆ 必要なのは《補導》か《保護》か

まず仁藤さんですが、自身も学生時代に渋谷などの繁華街を“漂流”していた経験をもつ彼女は、今は社団法人Colaboを立ち上げて、講演タイトル通り居場所のない少女たちをサポートしています。援助交際や売春などに関わり、「遊ぶ金ほしさ」「好きでやってるんだろう」といった偏見に晒されている少女たちの多くが、いかに追い詰められた状態で性産業者に搾取されているか、リアリティをもって学ぶことができました。

仁藤さんが力説するのは、「居場所のない少女たち」に行き届いた(それは単に少女たちを商品として消費するためなのですが)手を差し伸べるのは、ほとんど性風俗関係の人間たちだけだということ。行政や警察は少女たちを《補導》し、場合によっては更生施設へ送りますが、そこで受けるのはまず《懲罰》的な扱いだけだそうです。少女たちを保護し、支援し、普通の暮らしに戻れるよう責任をもって面倒をみる、という発想がなく、日本の《補導》システムは世界に類を見ない異常なものだと、仁藤さんは強く訴えていました。

◆ 傷ついた女性を守るノルウェー

元都議の三井マリ子さんは知る人ぞ知るフェミニズム界の闘士で、選挙制度などの問題でも国際的な活動を続けている頼もしい同志です。特に詳しいのは民主主義制度が進んでいると言われる北欧の社会制度で、今回の講演では中

でもトップクラスのノルウェーのお国事情を勉強させていただきました。

民主主義の先進国であるノルウェーでも、女性への暴力と差別の実態は深刻です。それは、法整備を含めクライシスセンター(DVシェルター)や相談体制などをきっちりと整え、日本女性から見たら羨ましいくらいの支援環境ができ上がっていてなお、助けを求める女性の数がいっこうに減らないという事実が如実に物語っています。

しかし少なくともノルウェーには、24時間365日オープンしているシェルターがあり、保護された女性は制限なしにいつまでも滞在でき、利用者たちが安心して社会復帰できるようさまざまな手立てが尽くされます。そして、これが大事なポイントだと思うのですが、職員は全員が常勤で収入も国立病院看護師並みということでした。駆け込む側も、受け入れる側も安心できる体制を作っていることが、質の高い支援内容を保証しているのだと思います。

◆ 「女性差別」は過去の話か？

2つの講演を聴き共通して痛感したのは、日本の女性支援システムがいかにいびつで遅れているかということです。しかし、私たちの目には女性問題のハードルはほとんど変わっていないと思えるのに、最近では「男女共同参画」を「人権」や「多様性」「共生社会」といった広範な概念の中に落とし込んで、「男女平等」の視点は古いものであるかのように扱われるくらいがあります。現実には、雇用条件ひとつとっても男女の格差は大きく、セクハラやレイプなどの事件で二次被害を受ける女性も後を絶ちません。

それでも、「誰もが自分らしく暮らせる社会」実現のためのヒントを、魅力的な2人の女性から沢山いただいたように思います。



街頭ではコミック・レポート『タンバリン通信』をお配りしています。

バックナンバーをブログに載せていますので、是非ご覧ください。

公式ブログ『キョーコ式ランドスケープ』

<http://kyokolandscape.blog.fc2.com/>

↑もちろん、コミック以外の記事も載せています!!

また Facebook と Twitter でも発信中!!



● お困りごとがありましたら、
● お気軽に下記へご相談ください。
● また、「伊地智恭子とまちづくりの会」
● (年会費 1,000 円) はいつでも会員募集中!
● ご寄付やボランティアも大歓迎です。
● ご連絡をお待ちしています。

● TEL / 042-400-6264

● E-mail / ipanema_red@yahoo.co.jp

● 伊地智 恭子(社民党)